

アクロス福岡文化誌5

福岡の町並み

アクロス福岡文化誌
編纂委員会編

海鳥社

はじめに

アクロス福岡文化誌編纂委員会

先人たちが築いてきた文化遺産や風土――〝ふるさとの宝物〟を再発見し、後世に伝えていくことを目的に刊行してきた「アクロス福岡文化誌」シリーズも、通算五巻目となりました。第五巻は「町並み」というテーマで、福岡県内に残る伝統的な町並みの歴史や魅力を総覧します。

福岡は古来より交通の要衝で、人や文物が盛んに往来し、そこに成立した集落を拠点に各種産業、地域社会が発達してきました。本書では県内の町並みを、その成り立ちから「武家の町」「商家の町」「門前の町」などと分け、町の歴史や文化、見所となる家並みや歴史的建造物などを紹介します。

執筆は様々なかたちで町並み保存やまちづくりに携わっておられる方々にお願いし、地域に密着した内容や情

報を盛り込んでいただきました。取材にご協力いただいた方々、写真や資料をご提供くださった機関・団体など、関係各位のお力添えに心よりお礼申し上げます。

近年、歴史的建造物や町並みの保存運動、それらを巡る町歩きが盛んになっています。時代の風雪を経て形成・継承されてきた伝統的な町並みには、その地域ならではの風土と人々の営みが奏でる魅力があり、その地を初めて訪れる者にも、懐かしさや安らぎを感じさせてくれます。本書では、歴史的な町割り、伝統的建造物が比較的濃密に残る地区を中心に取り上げましたが、福岡県内にはそれ以外にも様々な個性や味わいがある町並みが存在します。本書が、皆さんの住む町の魅力を再発見するきっかけとなれば幸いです。

末尾になりますが、本書の企画段階からご尽力いただいておりました宮本雅明先生（九州大学名誉教授）が、本の完成を見ないまま、不慮の事故で急逝されました。この場を借りて、先生のご冥福をお祈りします。



目次

Contents

はじめに　2

【総説】町並みの成立と魅力　6

武家の町

秋月　山間に凝縮された城下町の風情　18

柳川　水と柳の城下町　24

久留米　寺町に残る江戸期の面影　28

三奈木　田園地帯に点在する武家屋敷跡　30

商家の町

八女福島　伝統工芸が息づく重厚な町並み　34

黒木　矢部川と共生してきた山間の商都　40

草野　多彩な建築様式が混在する山裾の町　46

田主丸　天保絵図そのままの町割り　50

甘木・比良松　日田街道沿いの典型的な在郷町　52

筑後吉井　白壁の町家が連なる分限者の町　54

北川内　小さな盆地に同居する町並みと石橋　60

門前の町

宰府　今に続く「さいふまいり」の賑わい　64

英彦山　霊山に佇む山伏の坊跡　68
箱崎・馬出　豊かな歴史を刻む門前の町　74
今井・元永　仏教、神道、修験道が交わる港町　76
北野・善導寺　町に漂う往時の風情　78

港の町

博多　戦災を免れた伝統的町家　82
津屋崎　交易と塩田で栄えた筑前有数の浦　86
芦屋　多彩な文化が息づく古来の港町　88
宇島　周防灘随一の良港　90
小保・榎津　藩境で独自の発展を遂げた町　92

街道の町

木屋瀬　受け継がれゆく豊かな宿場遺構　98
内野・山家　急峻な峠を挟む二つの町　102
赤間・畦町・青柳　江戸期の風情を残す旧宿駅　104
香春・猪膝・大隈　秋月街道の歴史的風致　106
松崎　街道の歴史と文化が香る町　108
西新・高取・藤崎・姪浜・前原　街道沿いに点在する古い町並み　110
次郎丸・金武　宿場景観を濃密に残す町　114

産業の町

直方　数奇な歴史が育んだ多様な景観　118
飯塚　宿場町から川筋の「炭都」へ　122
三池　町の歴史を物語る炭鉱の遺構　126
若松・戸畑　日本の近代化を支えた港湾都市　128
門司　海の香りが漂うレトロな町　130

街角の風景

市場街　福岡県を代表する二大市場街、柳橋連合市場と旦過市場　136
商店街　多彩な表情を見せる〝我が町の顔〟　139
温泉街　疲れを洗い流し、心身を癒してくれる桃源郷　142

町並みを活かしたまちづくり

146
町並みを知るための建築用語　152
より詳しく知るための参考文献案内　157



田川市・石炭記念公園から市内を望む（斎藤英章氏撮影）

筑後吉井

ちくごよしい／うきは市

白壁の町家が連なる分限者の町

水の恵みと「吉井銀」よる発展

「筑紫次郎」の名で知られる九州随一の大河・筑後川と崖状の耳納連山の間に広がる筑後平野は、畑や水田が広がる豊かな農地を形成している。その中を久留米市から国道二一〇号線を東へ走り巨勢川を渡ると、突然白壁土蔵造りの町並みが出現する。それが、うきは市吉井町の中心市街地である吉井地区。往事の繁栄ぶりが窺える豪壮な商家が並んでいる。初めて訪れる人は、あっと驚くに違いない。交通量の多い国道沿いに、よくまあこれだけ多くの伝統家屋が残ったものだと。



吉井には、古代の条里制跡が見られるように古くから集落が存在していたが、現在の吉井の地割りが行われたのは、関ケ原の戦いの後に筑後国を領した田中吉政の治世下である。久留米城下から天領・日田へ向かう日田街道中道の東西約六〇〇メートルを枡形で限り、その中に短冊形の地割りを行った。中央の札の辻から南北へ道を延ばし、その先に相対するように大庄屋屋敷を配した。



明治20年建築の矢野家

吉井に御茶屋や札所、旅人手形改などの宿駅施設が置かれたのは、田中氏に替わって久留米城主となった有馬氏が寛文二（一六六二）年に領内に宿



「吉井銀」による繁栄を今に伝える、居蔵造りの重厚な町並み

駅を整備したことによる。こうして宿駅として出発した吉井であるが、次第に商工業機能を持つ在郷町として発展し、天領・日田の公金を扱う豆田町の掛屋「日田金」に対して「吉井銀」と呼ばれた金融業が十八世紀以降に発達し、経済的に大きな成長を遂げた。この頃には町並みが北へ広がっている。

この経済的発展の契機となったのが、筑後川から取水するために築かれた堰と大石・長野水道の開削である。それまでの吉井周辺の農地は、筑後川の水位が低いため畑地や荒地が主であったが、最初の工事が寛文四年に完成し、新たに約一八〇〇町歩の田畑の潅漑が可能となり、飛躍的に農作物の種類と収穫量が増えた。その豊かな農産物の加工・集散地として成長し、菜種から油を絞る製油業、櫨から蠟を製造する蠟屋、米から酒をつくる酒屋、大豆から醤油を製造する醤油屋などの農産物加工業が興隆した。一部の商人はその

利益を庶民に貸し付けてさらに資本力をつけ富を蓄積した。

町並みが維持されてきた要因

こうして分限者（ぶげんしゃ）となった商人は、明治期になり町並みに課せられていた建築制限が解かれると、草葺きの町家を瓦葺き土蔵造りの町家へ建て替えた。明治二（一八六九）年に起きた大火も、耐火性能に優れた土蔵造りの建築を促した。土蔵造りは住居と蔵を合わせた意味で「居蔵造（いくらづく）り」と呼ばれる。

大正四（一九一五）年には日田街道（現在の国道二一〇号）を拡幅し、久留米から日田へ通じる筑後軌道が完成した。その際に東西の枡形の間は道路北側を拡幅し、西の枡形から外へは道路南側を拡幅した。拡幅した道路片側で多くの建物が建て替えられることとなり、明治期と大正期の居蔵造りが道路両側で相対する町並みが形成された。このように大正期に道路拡幅を行っていたため、国道となっても大きな改変がなく、今日まで町並みが残った。

伝統家屋が多く残り、歴史的景観がまとまって存在している二〇・七ヘクタールが平成八年に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定された。地区内の一五八の伝統的建築物と九十九の石垣・石橋・石祠などの伝統的工作物、九の庭園や樹木などの環境物件が保存物件に特定されている。



上：真壁造りの町家・林肥料店
下：なまこ壁の松田家（写真右）

国道と「白壁通り」の見所

国道と白壁通りには、大型から小型









上：ねずみ漆喰壁が特徴的な碓井家
中：鏡田屋敷。幕末から明治期に建てられたもので、当初は郡役所の官舎であったという
下：水路から水を引き込んだ鏡田屋敷の池

の様々な大きさの重厚な入母屋桟瓦葺き白漆喰の居蔵造り妻入りの伝統家屋が軒を連ねるが、その中に平入り入母屋造りや、軽快な真壁造りの町家も混じる。

腰壁は、明治期建設の家屋は竪板張り、大正・昭和期はモルタル塗りが基本であるが、質の高い建物は「なまこ壁」となっている。内部は良質の欅、杉、松を用いて骨太な柱と梁で軸組みが構成されており、圧倒される空間である。平面は、通りに面した土間を店の間として利用し、間口が狭い小型の町家であれば通り土間に沿って一列に三室が並び、間口が広くなれば通り土間や部屋を広くするか角座敷を設ける。

町並みの中で目を引く大型町家としては、白壁通り東側に明治十二（一八七九）年建築の古賀家、国道南側に明治二十四年建設の松田家がある。古賀家はかつて製蠟業を営み広大な敷地を構え、主屋は妻入りの入母屋居蔵造り、腰はなまこ壁と、建設当時の姿をよく残した質の高い町家である。主屋脇に門を挟んで袖蔵を構える。

大正期の大型町家には、国道北側に立つ大正七（一九一八）年建築の碓井家がある。主屋は入母屋居蔵造り妻入りで、一階の窓にはめられた格子がねずみ漆喰壁に映える。主屋脇に瓦屋根付き板塀と門を構え、前庭の奥に角座敷を配置している。塀越しに見える樹木が国道の景観に潤いを与えている。

白壁通りが南新川に出合う辺りに市の公開施設「居蔵の館」が立つ。明治末期に建てられ、大正初期に改築された大型の町家で、主屋脇には板塀を配して広大な庭を囲っている。玄関を入ると土間があり、飴色に光る

二四〇ミリ角の大黒柱と太い梁の構成がシンプルで力強い。

二つ目の市の公開施設が、「居蔵の館」から東へ二〇〇メートルほどの位置に南新川に北面して立つ鏡田屋敷。数少ない屋敷型建築を代表するもので、幕末から明治初期に主屋が建築され、その後明治二十六年頃に座敷と二階の増築が行われている。当初郡役所の官舎として建築され、明治後期頃から住宅として使用されていた。屋敷の北と西には才の木溝が流れ、北の溝に架かる橋を渡り屋敷に入る。主屋は入母屋桟瓦葺き平入りの大型の住宅で、敷地の北東と北西の隅には土蔵が配されている。面白いことに文久三（一八六三）年建築の北東の土蔵は住宅として改装され、画家のアトリエ兼住まいとして利用されている。南側の庭園には北の才の木溝から西の溝へ流れをつくった池がある。水路の水を上手に利用していた当時の生活がわかり興味深い。



右：町並み交流館商家。昭和３年建築で、もとは乾物魚類問屋であった。現在は内部見学の他、食事を楽しむこともできる
下：町並み交流館商家の土間に掛かる長さ４間の梁



三つ目の公開施設が、国道南に立つ「町並み交流館商家」である。昭和三（一九二八）年に乾物魚類問屋「松源商店」として建築された入母屋居蔵造り妻入り町家。上屋梁間が六間と広く、立ちも高い大型の建物で、土間の梁が四間の長さを飛び、吹き抜けがある。二階には床の間のある大広間が設けられている。

吉井のもう一つの顔――水の町

吉井の町並みを特徴づけるのが、町並みの中を流れる複数の清流の存在である。日田街道の北側を並行して西流する災除川と南新川である。川には洗い場が設けられており、生活用水として利用されていた。災除川の護岸は玉石や割石の野面積み石垣が残り、川に向けて庭園を設けている家が多いことから、清流と味わい深い石垣、豊かな緑、その奥に見える伝統家屋といった、国道沿いとは異なる風情のある景観が



白壁の町並みの間を流れる災除川。写真右下に河童の石像が見える

楽しめる。河童伝説のある筑後川流域らしく、可愛らしい河童の石像が川べりに置かれているのはご愛嬌。

南新川は吉井の興隆を導いた大石・長野水道の一部に当たる。水流が多く、県道五一一号線に架かる橋からは、堰により分岐した水路が段違いに並行してとうとうと流れていく光景が見られる。下流には南新川沿いに遊歩道が設けられ、水神社で休憩しながら川と緑に囲まれた屋敷を眺められる癒しの空間となっている。かつては南新川と災除川の落差を利用して、二本の川の間に水路を引き水車を回していた。この二本の川に挟まれた金川地区では宝暦七（一七五七）年に最初の水車が設置され、その後精米や櫨実・菜種の粉砕のために次々に増設された。現在、水車は撤去されているが、家の間を抜ける水路は残っており、人々と水の密接な関わりに感心させられる。



このように、白壁居蔵造りの町並みだけが吉井ではなく、水と関わる空間を豊富に持っていることも魅力であり、吉井の町に奥行きを持たせている。平成二十二年六月に国道の電線地中化が完成し、町並み景観にますます磨きがかかっている。

［大森洋子］

執筆者一覧

大森洋子（久留米工業大学建築・設備工学科教授）
工藤　卓（近畿大学建築・デザイン学科教授）
河村哲夫（福岡県文化団体連合会専務理事）
古賀正美（久留米市文化観光部文化財保護課）
内田俊和（元甘木市教育委員会）
高口　愛（八女市都市計画課）
大島真一郎（八女市黒木総合支所産業経済課）
丸林禎彦（久留米市文化観光部文化財保護課）
城戸康利（太宰府市都市整備課）
田上　稔（福岡県教育庁総務部文化財保護課）
井澤洋一（博多津にぎわい復興計画研究会）
小川秀樹（行橋市教育委員会文化課）
嶋村初吉（西日本新聞社編集局）
竹川克幸（麻生西日本新聞ＴＮＣ文化サークル事務局長）
石橋泰助（旧吉原家住宅館長）
冨田孝浩（北九州市教育委員会生涯学習部文化財課）
久野隆志（福岡県教育庁総務部文化財保護課）
宮田浩之（小郡市都市建設部都市計画課）
田村　悟（直方市教育委員会庶務課）
坂井義哉（大牟田市企画総務部総合政策課世界遺産登録推進室）
加藤哲也（財界九州社編集委員）

アクロス福岡文化誌編纂委員会

会　　長　武野要子（福岡大学名誉教授）
副 会 長　西表　宏（香蘭女子短期大学教授）
監　　事　徳重忠彦（福岡県新社会推進部県民文化スポーツ課）
委　　員　飯田昌生（元テレビ西日本・ＶＳＱプロデューサー）
　　池邉元明（福岡県教育庁総務部文化財保護課）
　　加藤哲也（財界九州社編集委員）
　　河村哲夫（福岡県文化団体連合会専務理事）
　　木下陽一（写真家）
　　嶋村初吉（西日本新聞社編集局）
専門調査員　竹川克幸（麻生西日本新聞ＴＮＣ文化サークル事務局長）
事務局長　古川道夫（財団法人アクロス福岡事業部長）
事　務　局　緒方淑子（財団法人アクロス福岡）
　　福浦直美（同右）

アクロス福岡文化誌５
福岡の町並み
■
2011年３月20日　第１刷発行
■
編　者　アクロス福岡文化誌編纂委員会
■
発行所　アクロス福岡文化誌編纂委員会
〒810-0001　福岡市中央区天神１丁目１番１号
電話092(725)9115　FAX092(725)9102
http://www.acros.or.jp
発売　有限会社海鳥社
〒810-0072　福岡市中央区長浜３丁目１番16号
電話092(771)0132　FAX092(771)2546
印刷・製本　大村印刷株式会社
ISBN 978-4-87415-809-8
http://www.kaichosha-f.co.jp
［定価は表紙カバーに表示］